

疑惑

芥川龍之介

青空文庫

今ではもう十年あまり以前になるが、ある年の春わたくしじつせんりんりがく私は実践倫理学の講義を依頼されて、
 その間あいだかれこれ一週間ばかり、岐阜県下の大垣町おおがきまちへ滞在する事になった。元来地方有志
 なるものの難ありがた有迷惑な厚遇に辟易へきえきしていた私は、私を請待せいだいしてくれたある教育家の
 団体あらかじへ予め断りの手紙を出して、送迎とか宴会とかあるいはまた名所の案内とか、そのほ
 かいろいろ講演に附随する一切の無用な暇つぶしを拒絶したい旨希望して置いた。すると
 幸私さいわいの変人だと云う風評は夙つとにこの地方にも伝えられていたものと見えて、やがて私が向
 うへ行くと、その団体の会長たる大垣町長の幹旋あつせんによつて、万事がこの我儘な希望通り
 取計らわれたばかりでなく、宿も特に普通の旅館を避けて、町内の素封家そほうかN氏の別荘とか
 になつてゐる閑静な住居すまいを周旋された。私がこれから話そうと思うのは、その滞在中たいざいちゆう
 その別荘で偶然私が耳にしたある悲惨な出来事の顛末てんまつである。

その住居すまいのある所は、巨鹿城に近い廓町くわくまちの最も俗塵に遠い一区劃だった。殊に私
 の起臥きがしていた書院造りの八畳は、日当りこそ悪い憾うらみはあつたが、障子襖しょうじふすまもほどよく
 寂びのついた、いかにも落着きのある座敷だった。私の世話を焼いてくれる別荘番の夫婦
 者は、格別用のない限り、いつも勝手に下つていたから、このうす暗い八畳の間まは大抵森

閑として人気がなかった。それは御影の手水鉢の上に枝を延ばしている木蓮が、時々白い花を落すのでさえ、明に聞き取れるような静かさだった。毎日午前だけ講演に行った私は、午後と夜とをこの座敷で、はなはだ泰平に暮す事が出来た。が、同時にまた、参考書と着換えとを入れた鞆のほかに何一つない私自身を、春寒く思ふ事も度々あった。

もつとも午後は時折来る訪問客に気が紛れて、さほど寂しいとは思わなかった。が、やがて竹の筒を台にした古風なランプに火が燈ると、人間らしい氣息の通う世界は、たちまちそのかすかな光に照される私の周囲だけに縮まってしまった。しかも私にはその周囲さえ、決して頼もしい気は起させなかった。私の後にある床の間には、花も活けてない青銅の瓶が一つ、威かつくどつしりと据えてあった。そうしてその上には怪しげな楊柳觀音の軸が、煤けた錦欄の表装の中に朦朧と墨色を弁じていた。私は折々書見の眼をあげて、この古ぼけた仏画をふり返ると、必ず炷きもしない線香がどこかで匂っているような心もちがした。それほど座敷の中には寺らしい閑寂の気が罩っていた。だから私はよく早寝をした。が、床にはいつても容易に眠くはならなかった。雨戸の外では夜鳥の聲が、遠近を定めず私を驚かした。その声はこの住居の上にある天主閣を心に描かせた。昼見るといつも天主閣は、蓊鬱とした松の間に三層の白壁を畳みながら、

その反り返った家根の空へ無数の鴉からすをばら撒まいている。——私はいつかうとうとと浅い眠に沈みながら、それでもまだ腹の底には水のような春寒はるさむが漂っているのを意識した。

するとある夜の事——それは予定の講演日数が将に終ろうとしている頃であつた。私はいつもの通りランプの前にあぐらをかいて、漫然と書見に耽ふけっていると、突然次の間との境の襖が無気味なほど静に明いた。その明いたのに気がついた時、無意識にあの別荘番を予期していた私は、折よく先刻書いて置いた端書の投函とうかんを頼もうと思つて、何気なくその方を一瞥した。するとその襖ふすま側まがひのうす暗がりには、私の全く見知らない四十恰好しじゅうがっくの男が一人、端然として坐つていた。実を云えばその瞬間、私は驚愕——と云うよりもむしろ迷信的な恐怖に近い一種の感情に脅おびかされた。また実際その男は、それだけのシヨックに価すべく、ぼんやりしたランプの光を浴びて、妙に幽霊じみた姿を具えていた。が、彼は私と顔を合わすと、昔風に両肱りょうひじを高く張はつて恭うやうやしく頭かしらを下げながら、思つたよりも若い声で、ほとんど機械的にこんな挨拶の言を述べた。

「夜中やちゆう、殊に御忙しい所を御邪魔に上りまして、何とも申し訳の致しようはございませんが、ちと折入つて先生に御願ひ申したい儀がございまして、失礼をも顧ず、参上致したような次第でございます。」

ようやく最初のショックから恢復した私は、その男がこう弁じ立てている間に、始めて落着いて相手を観察した。彼は額の広い、頬ほおのこけた、年にも似合わず眼に働きのある、品の好い半白はんぱくの人物だった。それが紋附でこそなかったが、見苦しからぬ羽織袴で、しかも膝のあたりにはちゃんと扇面を控えていた。ただ、咄嗟とつさの際にも私の神経を刺戟したのは、彼の左の手の指が一本欠けている事だった。私はふとそれに気がつく、我知らず眼をその手から外そらさないではいられなかった。

「何か御用ですか。」

私は読みかけた書物を閉じながら、無愛想にこう問いかけた。云うまでもなく私には、彼の唐突な訪問が意外であると共に腹立しかった。と同時にまた別荘番が一言いちごんもこの客き来やぐらいを取次がないのも不審だった。しかしその男は私の冷淡な言葉にもめげないで、もう一度額を畳につけると、相不変朗読あいかわらずろうどくでもしそうな調子で、

「申し遅れましたが、私は中村玄道と申しますもので、やはり毎日先生の御講演を伺いに出て居りますが、勿論多数の中でございますから、御見覚えもございませんまい。どうかこれを御縁にして、今後はまた何分ともよろしく御指導のほどを御願ひ致します。」

私はここに至って、ようやくこの男の来意が呑みこめたような心もちがした。が、夜やちゆ

中書見の清興せいぎようを破られた事は、依然として不快に違いなかった。

「すると——何か私の講演に質疑でもあると仰おつしや有るのですか。」

こう尋ねた私は内心ひそかに、「質疑なら明みようにち日講演場で伺いましょう。」と云う体の善い撃退の文句を用意していた。しかし相手はやはり顔の筋肉一つ動かさないで、じつと袴の膝の上に視線を落しながら、

「いえ、質疑ではございません。ございませんが、実は私一身のふり方につきまして、善悪とも先生の御意見を承りたいのでございます。と申しますのは、唯今からざつと二十年ばかり以前、私はある思いもよらない出来事に出合ひまして、その結果とんと私にも私自身がわからなくなつてしまいました。つきましては、先生のような倫理学界の大家の御説を伺いましたら、自然分別もつこうと存じまして、今晚はわざわざ推参致したのでございます。いかがでございましょう。御退屈でも私の身の上話を一通り御聴き取り下さる訳には参りますまいか。」

私は答に躊躇ちゆうちよした。成程なるほど専門の上から云えば倫理学者には相違ないが、そうかと云つてまた私は、その専門の知識を運転させてすぐに当面の實際問題への靈活れいかつな解決を与え得るほど、融通の利く頭脳きの持ち主だとは遺憾ながら己惚うぬぼれる事が出来なかった。す

ると彼は私の逡巡^{しゆんじゆん}に早くも気がついたと見えて、今まで袴^{はかま}の膝の上に伏せていた視線をあげると、半ば歎願するように、怯^おず怯^おず私の顔^{かおいろ}色を窺いながら、前よりやや自然な声で、慇懃^{いんぎん}にこう言葉を継いだ。

「いえ、それも勿論強いて先生から、是非の御判断を伺わなくてはならないと申す訳ではございません。ただ、私がこの年になりますまで、始終頭を悩まさずにはいられたかった問題でございますから、せめてその間の苦しみだけでも先生のような方の御耳に入れて、多少にもせよ私自身の心やりに致したいと思うのでございます。」

こう云われて見ると私は、義理にもこの見知らない男の話を聞かないと云う訳には行かなかった。が、同時にまた不吉な予感と茫漠とした一種の責任感が、重苦しく私の心の上にのしかかって来るような心もちもした。私はそれらの不安な感じを払い除けたい一心から、わざと気軽らしい態度を装^{よそお}って、うすぼんやりしたランプの向うに近々と相手を招きながら、

「ではとにかく御話だけ伺いましょう。もつともそれを伺ったからと云って、格別御参考になるような意見などは申し上げられるかどうかかわかりませんが。」

「いえ、ただ、御聞きになつてさえ下されば、それでもう私には本望すぎるくらいでござ

います。」

なかむらげんどう

中村玄道と名のつた人物は、指の一本足りない手に畳の上の扇子をとり上げると、時々そつと眼をあげて私よりもむしろ床の間の楊柳觀ようりゅうかんのん音を偷み見ながら、やはり抑よくよ揚うに乏しい陰気な調子で、ときれ勝ちにこう話し始めた。

ちようど明治二十四年の事でございます。御承知の通り二十四年と申しますと、あの濃の尾うびの大地震おおじしんがございました年で、あれ以来この大垣おおがきもがらりと容子ようすが違つてしまいました。その頃町には小学校がちようど二つございまして、一つは藩侯の御建てになったもの、一つは町方まちかたの建てたものと、こう分れて居つたものでございます。私はその藩侯の御建てになったK小学校へ奉職して居りましたが、二三年前まえに県の師範学校を首席で卒業致しましたのと、その後のちまた引き続いて校長などの信用も相当にございましたので、年輩にしては高級な十五円と云う月俸を頂戴致して居りました。唯今でこそ十五円の月給取は露命つなも繋げないぐらいでございましょうが、何分二十年も以前の事で、十分とは参り

ませんまでも、暮しに不自由はございませんでしたから、同僚の中でも私などは、どちらかと申すと羨望せんぼうの的になったほどでございました。

家族は天にも地にも妻一人で、それもまだ結婚してから、ようやく二年ばかりしか経たない頃でございました。妻は校長の遠縁のもので、幼い時に両親に別れてから私の所へ片づくまで、ずっと校長夫婦が娘のように面倒を見てくれた女でございます。名は小夜さよと申しまして、私の口から申し上げますのも、異なものでございますが、至って素直な、はにかみ易い——その代りまた無口過ぎて、どこか影の薄いような、寂しい生れつきでございました。が、私には似たもの夫婦で、たといこれと申すほどの花々しい楽しさはございませんでも、まず安らかなその日その日を、送る事が出来たのでございます。

するとあの大地震おおじしんで、——忘れも致しません十月の二十八日、かれこれ午前七時頃でございましょうか。私が井戸端ばたで楊枝ようじを使っていると、妻は台所で釜の飯を移している。

——その上へ家がつぶれました。それがほんの一二分の間の事で、まるで大風のような凄まじい地鳴りが襲いかかったと思いますと、たちまちめきめきと家が傾かたいで、後はただ瓦の飛ぶのが見えたばかりでございます。私はあつと云う暇ひまもなく、やにわに落ちて来た底ひさしに敷かれて、しばらくは無我無中のまま、どこからともなく寄せて来る大震動の波に揺ら

れて居りましたが、やっとその庇の下から土煙の中へ這い出して見ますと、目の前にあるのは私の家の屋根で、しかも瓦の間に草の生えたのが、そっくり地の上へひしやげて居りました。

その時の私の心もちは、驚いたと申しましょうか。慌^{あわ}てたと申しましょうか。まるで放心したのも同前で、べつたりそこへ腰を抜いたなり、ちやうど嵐の海のように右にも左にも屋根を落した家々の上へ眼をやつて、地鳴りの音、梁^{はり}の落ちる音、樹木の折れる音、壁の崩れる音、それから幾千人もの人々が逃げ惑うのでございましょう、声とも音ともつかない響が騒然と煮えくり返るのをぼんやり聞いて居りました。が、それはほんの刹那^{せつないだ}の間で、やがて向うの庇^{ひさし}の下に動いているものを見つけますと、私は急に飛び上つて、凶^{わる}い夢からでも覚めたように意味のない大声を挙げながら、いきなりそこへ駆けつけました。庇の下には妻の小夜^{さよ}が、下半身を梁^かに圧^おされながら、悶え苦しんで居ったのでございます。

私は妻の手を執つて引張りました。妻の肩を押して起そうとしました。が、圧^おしにかかった梁は、虫の這い出すほども動きません。私はうろたえながら、庇の板を一枚一枚むしり取りました。取りながら、何度も妻に向つて「しっかりしろ。」と喚^{わめ}きました。妻を？いやあるいは私自身を励ましていたのかも存じません。小夜は「苦しい。」と申しまし

た。「どうかして下さいまし。」とも申しました。が、私に励まされるまでもなく、別人のように血相を変えて、必死に梁を擡もたげようと致して居りましたから、私はその時妻の両手が、爪も見えないほど血にまみれて、震えながら梁をさぐって居ったのが、今でもまざまざと苦しい記憶に残っているのでございます。

それが長い長い間の事でございました。——その内にふと気がつきますと、どこからか濛々とした黒煙くろけむりが一なだれに屋根を渡つて、むっと私の顔へ吹きつけました。と思うと、その煙の向うにけたたましく何か爆はぜる音がして、金粉きんぷんのような火粉ひのこがばらばらと疎まばらに空へ舞い上りました。私は気の違つたように妻へ獅し噛みつきました。そうしてもう一度無二無三むにむさんに、妻の体を梁の下から引きずり出そうと致しました。が、やはり妻の下半身は一寸も動かす事は出来ません。私はまた吹きつけて来る煙を浴びて、庇に片膝つきながら、噛みつくように妻へ申しました。何を？ と御尋ねになるかも知じません、いや、必ず御尋ねになりました。しかし私も何を申したか、とんと覚えていないのでございませう。ただ私はその時妻が、血にまみれた手で私の腕をつかみながら、「あなた。」と一言申したのを覚えて居ります。私は妻の顔を見つめました。あらゆる表情を失った、眼ばかり徒いたずらに大きく見開いている、気味の悪い顔でございませう。すると今度は煙ばかりか、

火の粉を煽った一陣の火気が、眼も眩^{くら}むほど私を襲って来ました。私はもう駄目だと思いました。妻は生きながら火に焼かれて、死ぬのだと思いました。生きながら？ 私は血だらけな妻の手を握ったまま、また何か喚^{わめ}きました。と、妻もまた繰返して、「あなた。」と一言申しました。私はその時その「あなた。」と云う言葉の中に、無数の意味、無数の感情を感じたのでございます。生きながら？ 生きながら？ 私は三度何か叫びました。それは「死ぬ。」と云ったようにも覚えて居ります。「己^{おれ}も死ぬ。」と云ったようにも覚えて居ります。が、何と云ったかわからない内に、私は手^て当^{あた}り次第、落ちてゐる瓦を取り上げて、続けさまに妻の頭へ打ち下しました。

それから後^{のち}の事は、先生の御察しにまかせるほかはございません。私は独り生き残りしました。ほとんど町中を焼きつくした火と煙とに追われながら、小山のように路を塞^{ふさ}いだ家々の屋根の間をくぐって、ようやく危い一命を拾ったのでございます。幸か、それともまた不幸か、私には何にもわかりませんでした。ただその夜、まだ燃えている火事の光を暗い空に望みながら、同僚の一人二人と一しよに、やはり一ひしぎにつぶされた学校の外の仮小屋で、炊き出しの握り飯を手にとった時とめどなく涙が流れた事は、未だにどうしても忘れられません。

なかむらげんどう
中村玄道はしばらく言葉を切つて、臆病らしい眼を畳へ落した。突然こんな話を聞かされた私も、いよいよ広い座敷の春寒が襟元まで押寄せたような心もちがして、
「成程」と云う元氣さえ起らなかった。

部屋の中には、ただ、ランプの油を吸い上げる音がした。それから机の上に載せた私の懷中時計が、細かく時を刻む音がした。と思うとまたその中で、床の間の楊柳觀音が身動きをしたかと思うほど、かすかな吐息をつく音がした。

私は慄えた眼を挙げて、悄然と坐っている相手の姿を見守った。吐息をしたのは彼だろうか。それとも私自身だろうか。――が、その疑問が解けない内に、中村玄道はやはり低い声で、徐に話を続け出した。

申すまでもなく私は、妻の最期を悲しみました。そればかりか、時としては、校長始め同僚から、親切な同情の言葉を受けて、人前も恥じず涙さえ流した事がございました。が、私があの地震の中で、妻を殺したと云う事だけは、妙に口へ出して云う事が出来なかったのでございます。

「生きながら火に焼かれるよりはと思つて、私が手にかけて殺して来ました。」——これだけの事を口外したからと云つて、何も私が監獄へ送られる次第でもございますまい。いや、むしろそのために世間は一層私に同情してくれたのに相違ございません。それがどう云うものか、云おうとするとたちまち喉元のどもとにこびりついて、一言も舌が動かなくなってしまうのでございます。

当時の私はその原因が、全く私の臆病に根ざしているのだと思いました。が、実は単に臆病と云うよりも、もっと深い所に潜んでいる原因があつたのでございます。しかしその原因は、私に再婚の話が起つて、いよいよもう一度新生涯へはいろいろと云う間際までは、私自身にもわかりませんでした。そうしてそれがわかった時、私はもう二度と人並の生活を送る資格のない、憐むべき精神上的の敗残者になるよりほかはなかつたのでございます。

再婚の話を私に持ち出したのは、小夜さよの親許おやもとになつていた校長で、これが純粹に私の

ためを計った結果だと申す事は私にもよく呑み込めました。また実際その頃はもうあの大地震おしんがあつてから、かれこれ一年あまり経った時分で、校長がこの問題を切り出した以前にも、内々同じような相談を持ちかけて私の口裏くちうらを引いて見るものが一度ならずあつたのでございます。所が校長の話を聞いて見ますと、意外な事にはその縁談の相手と云うのが、唯今先生のいらつしやる、このN家の二番娘で、当時私が学校以外にも、時々出稽でげ古いこの面倒を見てやつた尋常四年生の長男の姉だつたろうではございませんか。勿論私は一応辞退しました。第一教員の私と資産家のN家とは格段に身分も違いますし、家庭教師と云う関係上、結婚までには何か曰くいわがあつたろうなどと、痛くない腹を探られるのも面白くないと思つたからでございます。同時にまた私の進まなかつた理由の後うしろには、去る者は日に疎うとしで、以前ほど悲しい記憶はなかつたまでも、私自身打ち殺した小夜さよの面影が、
箒ほうき星ぼしの尾のようにぼんやり纏まつわつていたのに相違ございません。

が、校長は十分私の心もちを汲んでくれた上で、私くらしい年輩の者が今後独身生活を続けるのは困難だと云う事、しかも今度の縁談は先方から達たつての所望しよもうだと云う事、校長自身が進んで媒ばい酌しやくの労を執とる以上、悪評などが立つ謂いわれのないと云う事、そのほか日頃私の希望している東京遊学のごときも、結婚した暁には大いに便宜があるだろうと

云う事——そう事をいろいろ並べ立てて、根気よく私を説きました。こう云われて見ますと、私も無下^{むげ}には断つてしまふ訳には参りません。そこへ相手の娘と申しますのは、評判の美人でございましたし、その上御恥しい次第ではございますが、N家の資産にも目がくれましたので、校長に勧められるのも度重なつて参りますと、いつか「熟考して見ましよう。」が「いずれ年でも変りましたら。」などと、だんだん軟化致し始めました。そうしてその年の変つた明治二十六年の初夏には、いよいよ秋になったら式を挙げると云う運びさえついてしまったのでございます。

するとその話がきまつた頃から、妙に私は気が鬱^{うつ}して、自分ながら不思議に思うほど、何をするにも昔のような元気がなくなつてしまいました。たとえば学校へ参りましても、教員室の机に倚^より懸^かりながら、ぼんやり何かに思い耽^だつて、授業の開始を知らせる板木^{ばんぎ}の音さえ、聞き落してしまうような事が度々あるのでございます。その癖何が気になるのかと申しますと、それは私にもはつきりとは見極めをつける事が出来ません。ただ、頭の中の齒車がどこかしっくり合わないような——しかもそのしっくり合わない向うには、私の自覚を超越した秘密^{ひみつ}が蟠^{わだかま}つているような、気味の悪い心もちがするのでございます。

それがざつと二^{ふた}月^{つき}ばかり続いてからの事でございましたらう。ちようど暑中休暇にな

つた当座で、ある夕方私が散歩かたがた、ほんがんにべつていん本願寺別院の裏手にある本屋の店先を覗いて見ますと、その頃評判の高かった風俗画報と申す雑誌が五六冊、やそうきだん夜窓鬼談や月耕漫画などとしよに、石版刷の表紙を並べて居りました。そこで店先に佇みながら、何気なくその風俗画報を一冊手にとつて見ますと、表紙に家が倒れたり火事が始つたりしている画があつて、そこへ二行に「明治廿四年十一月三十日発行、十月廿八日震災記聞」と大きく刷つてあるのでございます。それを見た時、私は急に胸がはずみ出しました。私の耳もとでは誰かが嬉しそうに嘲笑あざわらいながら、「それだ。それだ。」と囁くような心もちさえ致します。私はまだ火をともしない店先の薄明りで、慌あわただしく表紙をはぐつて見ました。するとまつ先に一家の老若ろうにやくが、落ちて来た梁はりに打ちひしがれて惨死ざんしを遂げる画が出て居ります。それから土地が二つに裂けて、足を過つた女子供を呑んでいる画が出て居ります。それから——一々数え立てるまでもございませんが、その時その風俗画報は、二年以前の大地震おとしんの光景を再び私の眼の前へ展開してくれたのでございます。長良川ながらがわ鉄橋陥落の図、尾張紡績会社破壊の図、第三師団兵士屍体したいはつくつ発掘の図、愛知病院負傷者救護の図——そう云う凄惨な画は次から次と、あの呪わしい当時の記憶の中へ私を引きこんで参りました。私は眼がうるみました。体も震え始めました。苦痛とも歓喜ともつかない感情は、用捨ようしゃ

なく私の精神を蕩漾とうようさせてしまいます。そうして最後の一枚の画が私の眼の前に開かれた時——私は今でもその時の驚愕むしんがありあり心に残つて居ります。それは落ちて来た梁はりに腰を打たれて、一人の女が無惨むしんにも悶え苦しんでいる画でございました。その梁の横よこたわつた向うには、黒煙くろけむりが濛々と巻き上つて、朱しゆを撥はじいた火の粉さえ乱れ飛んでいるではありませんか。これが私の妻でなくて誰でしょう。妻の最期でなくて何でしょう。私は危く風俗画報を手から落そうと致しました。危く声を挙げて叫あかるぼうと致しました。しかもその途端に一層私を悸おびえさせたのは、突然あたりが赤々と明あかるくなつて、火事を想わせるような煙の匂においがぷんと鼻を打つた事でございます。私は強いて心を押し鎮めながら、風俗画報を下へ置いて、きよろきよろ店先を見廻しました。店先ではちようど小僧が吊つりランプへ火をとぼして、夕暗の流れている往来へ、まだ煙の立つ燐寸マッチがら殻がらを捨てている所だったのでございます。

それ以来、私は、前よりもさらに幽鬱な人間になつてしまいました。今まで私を脅おびやかしたのはただ何とも知れない不安な心もちでございましたが、その後はある疑惑ぎわくが私の頭の中おかしんに蟠わだかまつて、日夜を問わず私を責め虐さいなむのでございます。と申しますのは、あの大地震の時私が妻を殺したのは、果して已やむを得なかつたのだろうか。——もう一層露骨に申しま

すと、私は妻を殺したのは、始から殺したい心があつて殺したのではなかったろうか。大地震はただ私のために機会を与えたものではなかったろうか、——こう云う疑惑でございました。私は勿論この疑惑の前に、何度思い切つて「否、否。」と答えた事だかわかりません。が、本屋の店先で私の耳に「それだ。それだ。」と囁いた何物かは、その度にまた嘲笑つて、「では何故お前は妻を殺した事を口外する事が出来なかったのだ。」と、問い詰めるのでございます。私はその事実には思い当ると、必ずぐくりと致しました。ああ、何故私は妻を殺したなら殺したと云い放てなかつたのでございましょう。何故今日までひた隠しに、それほどの恐しい経験^{あざやか}を隠して居つたのでございましょう。

しかもその際私の記憶^{いま}へ鮮^{あざやか}に生き返つて来たものは、当時の私が妻の小夜^{さよ}を内心憎んでいたと云う、忌む^いましい事実でございます。これは恥を御話しなければ、ちと御会得^{ごえとく}が参らないかも知じませんが、妻は不幸にも肉体的に欠陥のある女でございました。（以下八十二行省略）……そこで私はその時まで、覺束^{おぼつか}ないながら私の道徳感情がともかくも勝利を博したものと信じて居つたのでございます。が、あの大地震のような凶変^{きようへん}が起つて、一切の社会的束縛が地上から姿を隠した時、どうしてそれと共に私の道徳感情も亀裂^{れつ}を生じなかつたと申せましょう。どうして私の利己心も火の手を揚げなかつたと申せま

しよう。私はここに立ち至つてやはり妻を殺したのは、殺すために殺したのではなかつたろうかと云う、疑惑を認めずには居られませんでした。私がいよいよ幽鬱になつたのは、むしろ自然の数^{すう}とでも申すべきものだつたのでございます。

しかしまだ私には、「あの場合妻を殺さなかつたにしても、妻は必ず火事のために焼け死んだのに相違ない。そうすれば何も妻を殺したのが、特に自分の罪惡だとは云われない筈だ。」と云う一条の血路がございました。所がある日、もう季節が真夏から残暑へ振り變つて、学校が始まつて居た頃でございますが、私ども教員が一同教員室の卓^{テエブル}子を囲んで、番茶を飲みながら、他^{たわい}暇もない雑談を交して居りますと、どう云う時の拍子だつたか、話題がまたあの二年以前の大地震に落ちた事がございます。私はその時も独り口を噤^{つぶ}んだぎりで、同僚^{どうりょう}の話の聞くともなく聞き流して居りましたが、本願寺の別院の屋根が落ちた話、船^{ふな}町の堤防が崩れた話、俵^{たわら}町の往来の土が裂けた話——とそれからそれへ話はずみましたが、やがて一人の教員が申しますには、中^{なか}町とかの備後屋^{びんごや}と云う酒屋の女房は、一旦梁^{はり}の下敷になつて、身動きも碌^{ろく}に出来なかつたのが、その内に火事が始つて、梁も幸^{さい}焼^{わい}け折れたものだから、やつと命だけは拾つたと、こう云うのでございます。私はそれを聞いた時に、俄^{にわか}に目の前が暗くなつて、そのまましばらくは呼吸さえも止るよ

うな心地が致しました。また實際その間は、失心したも同様な姿だったのでございまいしう。ようやく我に返つて見ますと、同僚は急に私の顔色が変わつて、椅子ごと倒れそうになつたのに驚きながら、皆私のまわりへ集つて、水を飲ませるやら藥をくれるやら、大騒ぎを致して居りました。が、私はその同僚に礼を云う余裕もないほど、頭の中はあの恐い疑惑の塊で一ぱいになつていたのでございます。私はやはり妻を殺すために殺したのではなかつたらうか。たとい梁に圧されていても、万一命が助かるのを恐れて、打ち殺したのではなかつたらうか。もしあのまま殺さないで置いたなら今の備後屋の女房の話のように、私の妻もどんな機会で九死に一生を得たかも知れない。それを私は情無く、瓦の一撃で殺してしまつた——そう思つた時の私の苦しさは、ひとえに先生の御推察を仰ぐほかはございけません。私はその苦しみの中で、せめてはN家との縁談を断つてでも、幾分一身を潔くしようと決心したのでございます。

ところがいいよその運びをつけると云う段になりますと、折角の私の決心は未練にもまた鈍り出しました。何しろ近々結婚式を挙げようと云う間際になつて、突然破談にしたいと申すのでございますから、あの大地震の時に私が妻を殺害した顛末は元より、これまで私の苦しい心中も一切打ち明けなければなりませんまい。それが小さな私には、い

ざと云う場合に立ち至ると、いかに自ら鞭撻みづかしても、断行する勇氣が出なかつたのでございます。私は何度となく腑甲斐ふがいない私自身を責めました。が、徒いたずらに責めるばかりで、何一つ然るべき処置も取らない内に、残暑はまた朝寒あささむに移り變つて、とうとう所謂華燭いわゆるかしよくの典を挙げる日も、目前に迫つたではございませんか。

私はもうその頃には、だれとも滅多に口を利きかないほど、沈み切つた人間になつて居りました。結婚を延期したらと注意した同僚も、一人や二人ではございません。医者に見て貰つたらと云う忠告も、三度まで校長から受けました。が、当時の私にはそう云う親切な言葉の手前、外見だけでも健康を顧慮しようと云う氣力さえすでになかつたのでございませう。と同時にまたその連中の心配を利用して、病氣を口実に結婚を延期するのも、今となつては意氣地いくじのない姑息手段こそくしゅだんとしか思われませんでした。しかも一方ではN家の主人などが、私の氣鬱きうつの原因を独身生活の影響だとしても感違あやまいをしたのでございませう。一日も早く結婚しろと頻しきりに主張しますので、日こそ違いますが二年前ぜんにあの大地震のあつた十月、いよいよ私はN家の本邸で結婚式を挙げる事になりました。連日の心労に憔悴しょうすいし切つた私が、花婿はなむこらしい紋服を着用して、いかめしく金屏風を立てめぐらした広間へ案内された時、どれほど私は今日の私を恥しく思つたでございませう。私はまるで人目を

偷ぬすんで、大罪惡を働こうとしている惡漢のような氣が致しました。いや、ような氣ではございせん。實際私は殺人の罪惡をぬり隠して、N家の娘と資産とを一時盜もうと企てている人非人にんびにんなのでございます。私は顔が熱くなつて参りました。胸が苦しくなつて参りました。出来るならこの場で、私が妻を殺した一条を逐ちく一白状いちちしてしまいたい。——そんな氣がまるで嵐のように、烈しく私の頭の中を駆けめぐり始めました。するとその時、私の着座している前の畳へ、夢のように白羽しろはぶ二重の足袋が現れました。続いて仄ほかな波の空に松と鶴とが霞んでいる裾模様が見えました。それから錦きん欄らんの帯、はこせこの銀鎖、白襟と順を追つて、鼈べつこ甲こうの櫛くし笄けいが重そうに光っている高島田が眼にはいった時、私はほとんど息がつまるほど、絶対絶命な恐怖に圧倒されて、思わず両手を畳へつくと、『私は人殺しです。極重惡ごくじゆうあくの罪人です』と、必死な声を挙げてしまいました。……

中村玄道なかむらげんどうはこう語り終ると、しばらくじつと私の顔を見つめていたが、やがて口もとに無理な微笑を浮べながら、

「その以後の事は申し上げるまでもございますまい。が、ただ一つ御耳に入れて置きたいのは、当日限り私は狂人と云う名前を負わされて、憐むべき余生を送らなければならなくなつた事でございます。果して私が狂人かどうか、そのような事は一切先生の御判断に御任かせ致しますよう。しかしたとい狂人でございしても、私を狂人に致したものは、やはり我々人間の心の底に潜んでいる怪物のせいではございますまいか。その怪物が居ります限り、今日私を狂人と嘲笑っている連中でさえ、明日はまた私と同様な狂人にならな

いものでもございません。——とまあ私は考えて居るのでございますが、いかがなものでございましょう。」

ランプは相不変私とこの無気味な客との間に、春寒い焰を動かしていた。私は楊柳観音を後にしたまま、相手の指の一本ないのさえ問い質して見る気力もなく、黙然と坐っているよりほかはなかつた。

(大正八年六月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年12月1日第1刷発行

1996（平成8）年4月1日第8刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utyama

校正：かとうかおり

1998年12月8日公開

2004年3月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

疑惑

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>